

## 甲状腺外科草子 79 (承前)

### 藤堂高虎の復活：秀吉時代

杉野圭三

豊臣秀長の養子秀保の死後に出家した高虎だが、秀吉の命により生駒親正が説得を行い、還俗（文禄4年：1595）、伊予国板島（現在の宇和島市）7万石の大名として復活した。

板島丸串城は後に大規模な改修で、**宇和島城**に改称された。高虎の後、伊達氏が領主となり、城の改修が行われ現在の天守が残る。小高い丘に作られた眺めの良い城である。



宇和島城



同天守からの展望（豊後水道を望む）

高虎は、豊臣秀長との関係が深かった千利休とも交流があり、茶湯の素養や政治的關係が深かったものと考えられる。加藤嘉明や加藤清正と不仲であったとされ、豊臣政権の中では穏健派と考えられる。

秀長は武断派の加藤清正らと文官派の石田三成らの緩衝材として調整を行ってきたが、病気の進行と共に政治の舞台から遠ざかるようになった。秀長は朝鮮出兵に反対だったとされ周囲との交渉を行うつもりだったようだが病に勝てず、秀吉を止める役割を果たせなかった。高虎も当然反対派と考えられるが、この時代に秀吉の暴挙を止められる人間はもはやいなかった。

秀長死後（1591）、**千利休切腹**（1591）、朝

鮮出兵（**文禄の役**、1592）、**秀次切腹**、（1595）が起こり、豊臣政権は大混乱となった。

高虎は**慶長の役**（慶長2年、1597）で水軍を率い、漆川梁海戦、南原城の戦い、鳴梁海戦に参戦、帰国後に**大洲城**1万石を加増され8万石となる。高虎自身は朝鮮出兵のことでは口が重い。藤堂家の歴史を編纂した『**宗国史**』に高虎の言葉が残る。『親筆笥（さつ）記（随想録）』に曰く、韓に在りしばしば力戦す。しかれどもその詳細（つまびらか）を載せず。考うべからざる已』と記されている。苦い無益な戦いの思い出なのかもしれない。



肱川越しの大洲城

明治21年以前の大洲城



現在の大洲城天守閣

**大洲城**は明治21年（1888）に廃城となり取り壊されたが、2004年再建された。近年では珍しく木造での再建となり、宮大工や現地の大工の総力を挙げ素晴らしい天守が再建された。伊予大洲は松山からJR普通列車では1時間以上かかるが、特急では約40分で着く。風光明媚で街並みは落ち着いた雰囲気でもしきのどかな風情で、市内には中江藤樹ゆかりの至徳堂もあり観光に最適の地である。

高虎は宇和島、大洲、今治に城を築き、愛媛と縁が深い。

参考資料：下天を謀る（安部龍太郎）、Wikipedia、大洲城公式 Website

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2023年10月26日